

平易の説かれた初心者向け学書。全体は3部に分かれ、第1部では本意を軸に連歌の心得を述べ、第2部では発句・切字等につき説明、第3部では四季・多義に用いられる語・恋などの部門別に連歌語彙を示して付注する。安土桃山連歌界の第一人者里村紹巴(1525c～1602)の作、時の権力者豊臣秀吉に献ぜられた。なお跋文中の「天つ正しき十とて(せ)の三が一の秋のはじめ」は、源氏物語葵の巻によった表現であり、中世の解釈たとえば紹巴自身の『源氏物語紹巴抄』でも「三が一」は「四」の言いかえとするので、天正14年(1586)七月の成立。やや厚手の斐紙列帖装、表紙を付さず伝来し、古色の好ましい典籍で、墨付53丁のうち32丁オモテ7行目あたりまで能筆にて書写、以下跋文まで若干劣った手で写す。本文の次に古今集・拾遺集からの歌の抜書7首、また旧蔵者と覚しき「福屋忠三郎正重」「中山権七郎」の署名などが見える。近世極初期写と推され、ほぼ同じ頃の写しである内閣文庫本・寛永四年版本と字句、項目の順序に異同少なからず。(高田)

【書誌】写 1冊。里村紹巴著。江戸時代初期写。福屋忠三郎筆。列帖装。縦 24.8、横 16.7 糎。字面の高さ、約 20.5 糎。本文共紙・斐紙。墨付 55 丁。每半葉 6 ～ 9 行。奥書「此一帖は日の本をひとせたらぬ／ほどこにしたかへたまふとて君より／天か下御預りのまつりことの／御いと おはしませはやまとうた越つらね給へる御心もち／あそはされしを見侍るに万／代までのたからと成へしかゝる／時に相奉るよろこひを天ツ／正しき十とての三ヶ一の秋のはしめにするすもの也／法橋／紹巴」奥書「主は福屋忠三良／正重(花押)」